



弥生の出雲王に出会える

季刊

第47号

(2022年10月)



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

★冬季企画展

「鉄と船でたどる出雲

〜古文書をひもとく〜

前期11月26日(土)〜12月28日(水)
後期1月5日(木)〜2月6日(月)

当館では、過去2回「田儀櫻井家のたたら製鉄」をテーマとするギャラリー展を実施しました。今回はそれらの内容をふまえ、田儀櫻井家のたたら製鉄と密接な関わりを持った出雲の廻船業者に注目しました。出雲の鉄と、船の関わりが見える出雲市内の古文書を中心に展示します。また、コラムとして古文書の保存方法について紹介します。

なお、今回の展示では前期と後期で展示品の入れ替えを行います。そのため、1月4日は企画展をお休みさせていただきます。(博物館は通常通り開館しております。)

1 田儀櫻井家とたたら製鉄

田儀櫻井家によるたたら製鉄は、江戸前期から明治時代にかけての約250年にわたり続きました。同家の製鉄の大きな特徴は、たたら場を山間部だけでなく海辺にも所有した点です。特に田儀浦(現・田儀港)に近い越堂たたら

が主力のたたら場だったことがわかっていきます。

海と山の両方でたたら場を経営した田儀櫻井家は、出雲の地に何をもたらしたのでしょ。

その活動と歴史を知ることのできる史料として、田儀櫻井家文書「鉄山証文小日記」(展示・前期)「年々見合帳」(展示・後期)などの古文書と、たたら製鉄や鍛冶で使用した道具を展示します。



「年々見合帳」(左) 「鉄山証文小日記」(右)

2 出雲の廻船業

田儀櫻井家のたたら製鉄によって生産された鉄は出雲の地だけで使用されたわけではありませんで

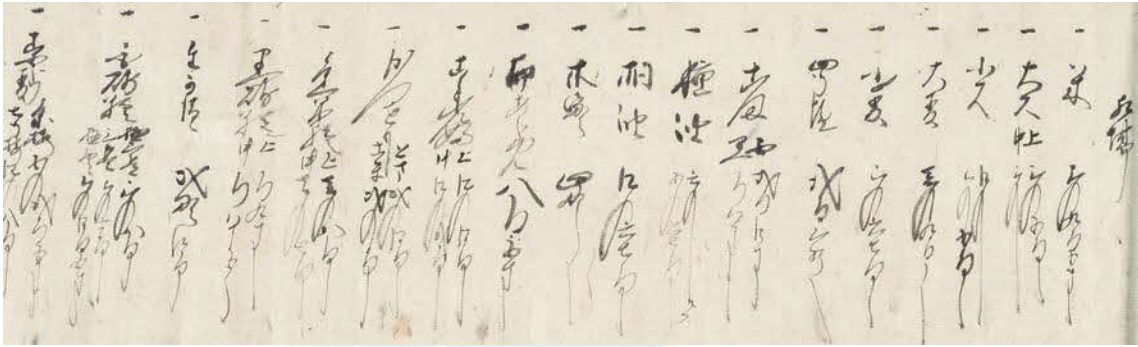
した。たたら場で生産された鉄は主に田儀浦を経由し、大坂や能登など各地へ運ばれました。その輸送の担い手となったのが、地元、出雲の廻船業者でした。廻船業者との密接な関わりは、田儀櫻井家独自の多彩な販路を開拓し、経営を支えました。

廻船業者は出雲の鉄や特産品を大坂などへ運び、他国の特産品を売買しながら出雲に戻りました。こうして各地を巡りながら商売を行った廻船業者にとって、各地から送付されてくる手紙や相場表は商いのタイミンングや商品を決めるのに重要な情報でした。江戸末期から口田儀(現・多伎町)で廻船業を営んでいた鳥屋尾家に伝わる古文書にも多くの相場表が残されています。今回展示する鳥屋尾家文書「相場」(展示・前期)には、米や油などの取引価格が書かれています。こうした相場表を見て取引を行ったのでしょうか。

この他にも当時の廻船業者の様子を知ることのできる資料を多数展示します。

また、廻船業者は鉄の販売だけでなく、越堂たたらへ鉄の材料となる砂鉄、燃料となる木炭を運び

ました。田儀櫻井家と廻船業者は出雲の鉄の生産・流通を共に担っていたのです。(永川ひかる)



烏屋尾家文書「相場」(一部)

★ギャラリー展

「いにしへのボードゲーム
—双六・樗蒲・囲碁・将棋—」

11月2日(水)〜2月27日(月)

ボードゲームとは、専用のボード(盤)の上で、駒を置いたり、動かしたりして遊ぶゲームのことです。現在で言う「オセロ」や「人生ゲーム」などが知られているでしょう。

こうしたゲームに熱中したのは、むかしの人たちも同じでした。今回のギャラリー展では、日本で古代から長く親しまれたボードゲーム、双六・樗蒲(かりうち)・囲碁・将棋に注目します。

今回は、双六と樗蒲についてご紹介します。

双六と言えば、サイコロを振って「上がり」を目指すゲームを思い浮かべる人が多いでしょう。こうした双六は絵双六と呼び、江戸時代後半になって広まりました。

一方で、飛鳥時代から江戸時代まで人びとが楽しんだ双六を盤双六と呼びます。盤双六は、左右12区画に区切られた盤を挟んで二人が向かい合い、盤上にそれぞれ白黒15個の駒を動かすことで、勝負をします。

平安時代に清少納言が記した随筆『枕草子』には、「つれづれなる(退屈な)もの」として「馬下りぬ双六」があげられています。馬とは双六の駒のことで、互いの駒が思うように進まず、勝負がつかないさまを言ったものです。また、清少納言は「つれづれなくさむもの」に「碁、双六、物語」と記していて、退屈だけでも飽きることはないという、双六に対する彼女の思いを読み取れます。

一方で樗蒲については、類似の遊びは現在の日本に残っていません。しかし、韓国の「ユンノリ」と呼ばれるボードゲームが樗蒲のルーツと考えられ、今でも正月などに家族で楽しむ伝統的な遊びとして知られています。

樗蒲とユンノリで共通するのは、四角形あるいは円形と、その中心に向けて二〜三本の直線を交差させる盤面を列点で表現することです。この点上に駒を置いて、勝負をしました。この駒を動かすには、サイコロではなく、断面がかまぼこ形の4本の棒が使われ、曲面が下になる場合と平面が下になる場合の組み合わせで、駒の進む数が決められたようです。



盤双六で遊ぶ子どもたち
(公文教育研究所蔵)

(高橋 周)

双六と樗蒲は、ともに「博戯」(賭博)として律令で禁じられていました。それでも、天皇・貴族から庶民に至るまで興じていたようです。樗蒲の盤面と考えられるものはほとんどが土器や木製品に描かれており、すぐに廃棄できるようにしていたと考えられます。つまり、禁じられた遊びと知ったうえで、見つからないようにしたのでしょう。

ところで、こうした双六と樗蒲の盤面と類似した文様を描いた奈良時代の土器が出雲市内でも見つかっています。どうやら古代出雲の人びともこれらのボードゲームを興じていたようです。

★速報展

「その土器なぜ伏せた？」

—大塚遺跡の発掘調査速報—

9月28日(水)～1月30日(月)

大塚遺跡は出雲市大塚町に所在し、出雲平野のほぼ中央に位置する遺跡です。今回の速報展では、民間開発に伴って2020(令和2)年に実施した発掘調査の成果をご紹介します。

今回の調査地点は遺跡の北西端部にあたり、約250㎡(学校のプールとほぼ同じ面積)の調査区内に遺構が濃密に分布していました。特に古墳時代中期から後期頃(5～6世紀)の遺物が多く出土しました。

なかでも、注目されるものが土師器の甕2点を埋納した穴です。この穴は大きさ約90×90cm、深さ約35cmの方形です。そして、穴の底へ半分に砕いた甕を下に敷き、その上に完形の甕を伏せた状態で出土しました。甕の特徴から、時期は古墳時代中期(5世紀)と考えられます。特異かつ丁寧に組み合わせられた出土状況から、意図的に穴へ埋納された可能性が高いと思われま

す。同じ時期の類似例によれば、こ

のような土器の埋納行為には、建物の地鎮や水辺での灌漑の祭祀、井戸の維持や廃絶の祭祀など、出土状況に応じて、様々な目的が想定されています。

では、大塚遺跡における甕の埋納行為には、どのような目的や意図があったのでしょうか。

今回の展示では、実際に出土した甕を使って埋納状況を再現し、甕の埋納にこめられた意図や目的をご紹介します。ぜひこの機会にご覧ください。

(下江 裕貴)



穴に埋納された甕

★古文書の森をゆく⑫
「商売は情報が命！」

江戸時代、物資の大規模輸送と言えば廻船が主役を担っていました。出雲国においても廻船は大きな役割を担っており、鷺浦、宇籠、杵築などが主な寄港地として栄えていました。

廻船は全国を廻って各地から物資を運び、商売をしていました。なかでも大坂は江戸と並んで物資が集積する一大市場であり、出雲の産物も数多く出荷されていました。廻船で送る最たる産物は年貢米です。大坂には各藩の蔵屋敷が置かれ、盛んに取引が行われました。出雲国からは他にも鉄や木綿、木蠟などが出荷されていました。

これらの産物を大坂市場へ送り、取引する際に重要なものが値段の相場でした。現在の株などと同じように産物の値段は日々変動し、突然暴落したり、逆に高騰したり、廻船を使う商人や各種産物の生産者の暮らしに大きな影響を与えました。それゆえ、廻船業者は大坂に常駐する人員を配置したり、船頭から地元へ手紙でそのときの相場を知らせるようにした

り、速やかに新情報を得られるようにしていました。

かつて口田儀(現・多伎町)で廻船業を営んでいた鳥屋尾家に伝来した古文書の中には複数の相場表が残されています。見てみると、鉄の商品名の「小割」「千割」「銑」の他に木綿や桐油、大豆や小麦などの穀物から砂糖やそうめん、鯉節などが記載されていて、幅広い産物を扱っていた様子が窺えます。砂糖や鯉節には産地や品質によって違う値段が書かれており、売買する産物の詳細な情報が必要だったことがわかります。良いものを安く仕入れて高く売るの



相場表の一部(鳥屋尾家文書)

(荒川 英里)

★展示のご案内

▼冬季企画展

11月26日(土)～2月6日(月)

「鉄と船でたどる出雲」

～古文書をひもとく～

●ギャラリートーク

12月17日(土)・1月21日(土)

▼ギャラリー展

開催中～10月31日(月)

「いつまでも戦後でありたい2022」

旧大社墓地跡の調査速報

●ギャラリートーク

10月16日(日)10時から

▼ギャラリー展

11月2日(水)～2月27日(月)

「いにしへのボードゲーム」

～双六・樗蒲・囲碁・将棋～

●ギャラリートーク

12月4日(日)・1月15日(日)

※いずれも10時から

▼速報展

好評開催中～1月30日(月)

「その土器なぜ伏せた?」

～大塚遺跡の発掘調査速報～



★講座・講演会のご案内

▼館長講座

①10月8日(土) 14時～16時

「今市大念寺古墳について考える」

②11月12日(土) 14時～16時

「妙蓮寺山古墳と放レ山古墳」

～について考える～

③12月10日(土) 14時～16時

「上塩治築山古墳と上塩治」

横穴墓群について考える」

●講師 花谷 浩(当館館長)

●定員 各回50名

●受講料 300円

▼ギャラリートーク関連体験講座

12月17日(土)14時～16時

「みんなで遊ぼう!むかしの」

ボードゲーム・盤すごろく」

●講師 木子 香氏

(大阪電気通信大学准教授)

●定員 ペア15組

●参加料 無料

※最新情報は博物館ホームページをご確認ください。

講座の申込について

当日受付なし

事前申込必須(電話・FAXのみ)

●申込受付時間 9～17時

●必要事項 氏名・電話番号・住所

※講座当日は、マスク着用、手指消毒、体温測定にご協力ください。

★館長古采蒔

今年も8月9日「長崎を最後の被爆地に」との想いのもと、平和式典が開催された。田上市長は「核兵器使用は杞憂でなく、今ある危機」とかつてないほど言葉を強めた。77年前のこの日、長崎には二人の島根県人が居た。

一人は永井隆博士(1908～51)。長崎医科大学(当時)で放射線医学を専攻。大学の助教だった。今年の式典で山里小学校の学童が歌った「あの子」。作詞は永井博士だ。

もう一人は、長崎純心高等女学校(当時)の校長だった江角ヤス(斐川町久木出身、1899～1980)。あの日、長崎の校舎で被爆した彼女は、永井博士の治療を受けて一命をとりとめた。

広島にしても長崎にしても、米軍は正確な原爆投下に成功している。なぜ可能だったか。それは練習を繰り返したからに他ならない。長崎に落とされた原爆ファットマンと同形の模擬爆弾はその形からパンプキン(かぼちゃ)と呼ばれた。これを使った練習が原爆投下の半年以上前から重ねられた。

愛媛県新居浜、滋賀県大津、富

山さらには東京の皇居近くにも落とされた。1945年の日本は戦争など遂行できる国ではなかった。さて、江角ヤスは女性でも理科系を専攻できた東北大学に入学、仙台の地で信仰に出会いカトリック教徒となった。永井博士も長崎の地で入信していた。

1939年、長崎純心高等女学校最初の卒業式に際し、江角校長は卒業生に、小さくとも世を照らす一本の「純心マッチたれ」と語った。この言葉に感銘を受けた永井博士は「純心マッチの歌」を作詞された。その二番「私は小さい純心マッチ/鉄をとかした溶鉱炉さえ/もとは一本マッチの力」

(花谷 浩)

(発行)出雲弥生の森博物館

2022年10月

〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp
<http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori>

- 入館料/無料
- 開館時間/9:00～17:00
(入館は16:30まで)
- 休館日/火曜日
(祝日の場合は翌平日)
年末年始

